

隠喩文の理解のメカニズムと理解時に使われる知識 (Metaphoric language processing and knowledge base)

社会情報学科 佐山 公一

目次

- 1 属性のマッチング
 - 1.1 顕著性の不均衡：比喩として理解されるための必要条件
 - 1.2 属性の不等
 - 1.3 マッチングのメカニズム
 - 1.4 属性の導入
 - 1.5 マッチングにおける属性の選択
- 2 文脈・状況に依存したアドホックなカテゴリー化
 - 2.1 アドホックカテゴリー
 - 2.2 文脈・状況に依存したアドホックなカテゴリー化
 - 2.3 暗示的な比喩的包含関係としての直喩
- 3 マッチングか？アドホックなカテゴリー化か？
 - 3.1 文字通りの意味の文の情報性
 - 3.2 属性の選択
 - 3.3 隠喩としての理解とアドホックではないカテゴリー化との関係
- 4 隠喩文の理解に使われる知識（データ）
 - 4.1 概念的比喩と意味関係のタイプとしての文字通りの意味
 - 4.2 隠喩文の理解過程における概念的比喩の役割
 - 4.3 隠喩的な理解と類推との関係
- 5 まとめ

[引用文献]

本稿では、文の隠喩的な解釈を生み出す基本的な処理のメカニズムとその処理を行う際に使われる知識（データ）の性質について考察する。本稿の以下では、

隠喩文の処理のメカニズムとして、これまでに提案されてきている認知心理学的なモデルを紹介する。第1節では、顕著性の不均衡 (salience imbalance; Ortony, 1979) にもとづいて属性のマッチングを行う隠喩文の理解のモデルを紹介する。その際、顕著性の不均衡の概念に則ったこれまでの説明に不十分な点を指摘し、そうした点がどのように改善されることになるかを考察する。第2節では、アドホックカテゴリー (ad hoc category) の考えを用いたカテゴリー化 (categorization) による隠喩文の処理のモデル (Glucksberg & Keysar, 1990) を紹介する。続いて、第3節では、属性のマッチングによるモデルとカテゴリー化によるモデルを比較する。その際、顕著性の不均衡の仮説に対する Glucksberg and Keysar (1990) の批判をとりあげ、それらが実際には顕著性の不均衡によっても説明できることを述べ、属性のマッチングのモデルの方が妥当かもしれないことを示唆する。第4節では、隠喩文の理解を支える知識 (データ) として、Lakoff と彼の共同研究者たち (Lakoff, 1987; Lakoff & Johnson, 1980; Lakoff & Turner, 1989) の言う概念的比喩 (conceptual metaphor)¹⁾ および意味的な“関係”としての文字通りの意味 (literal meaning) があることを述べ、それぞれがどのように隠喩文の処理を支えているかを文例を交えながら論じる。そして、そうした知識を利用する過程という観点から考えて、隠喩文の理解のメカニズムのモデルとして属性マッチングのモデルの方が妥当であると結論する。第5節はまとめである。

1 属性のマッチング

隠喩文の理解に関する研究の多くは、最も簡単な文形式である (1a), (2a) の形式の文を考察の対象としてきている。“A”, “B” は、いずれも名詞である。(1a) の形式をとる文の例には (1b) が、(2a) の形式の文の例には (2b) がある。

1) 概念的比喩は、慣習的比喩、規約的比喩 (ともに conventional metaphor の訳語) とも呼ばれる。

- (1a) A is B.
- (1b) Man is a wolf.
- (2a) A は B である。(または, A は B だ。)
- (2b) 女性 は 太陽 である。

Ortony (1979) は, (1a) の形式の文が隠喩として理解されることが, その文に “like” のような類似性の標識 (marker) のついた (3a) の形式の文 (日本語では, (3b) の形式の文がそれに相当する) が直喩として理解されることと基本的に同じであり, 隠喩としての理解を直喩としての理解の特別な場合とみなす。

- (3a) A is like B. (A, B : 名詞)
- (3b) A は B のようである。(または, A は B のようだ; A, B : 名詞)

すなわち, 隠喩としての理解も直喩としての理解も, 主語 “A” の指示する概念 A と述語 “B” の指示する概念 B との間の “比喩的比較 (metaphorical comparison)” として理解される。隠喩としての理解は, 類似性の標識が明示されていない文を比喩的比較とみなし理解する必要があるという点で特別である。

Ortony は, 比喩的比較の文の理解過程を, 属性 (attribute, predicate) のマッチングの過程ととらえる。すなわち, 述語 “B” の指示する概念 B のもつ顕著性 (salience) の程度の高い属性を, それら属性と同一のまたは類似した, 主語 “A” の指示する概念 A の属性と対応させることによって理解が成立する, と考える。結果的に, 対応させられた主語の概念 A の属性の顕著性の程度は (少なくとも一時的に) 高められる。ここでいう顕著性とは, ある概念の有する特定の属性が, その概念の他の属性と比べ “目立っている (prominent)” 程度あるいは “重要である (important)” 程度を指す (Ortony, 1979)。顕著性は,

連想課題のような、被験者が意識的なコントロールを行うことの少ない課題に最もよく反映されるものと考えられる。実際、楠見（1985；実験Ⅰ）は、属性を表す語に連想語を制限した連想の実験を行い、各連想語の反応頻度を顕著性の測度と考え、顕著性の不均衡の仮説を確認している。1.1で詳しく述べるように、比喩的比較（隠喩または直喩）として理解される文においては、顕著性の不均衡の状態、すなわち、述語の概念Bの属性の顕著性が高く、その属性に対応づけられる主語の概念Aの属性の顕著性が低い状態になっている必要がある。

Ortonyによれば、ある属性の顕著性は、その属性をもつ個々の概念ごとに相対的に決まる、とされる。彼自身の例を引けば、概念「磁石」の属性「鉄でできていること」は、概念「線路」の属性「鉄でできていること」よりも顕著性が高く、また、「消防自動車」の属性「赤い」は、「煉瓦」の属性「赤い」よりも顕著性が高い、ということになる。

1. 1 顕著性の不均衡：比喩として理解されるための必要条件

Ortonyは、(3a)の“A is like B”の文形式をとる文を、その文の述語の指示する概念Bの属性とそれに対応づけることのできる主語の指示する概念Aの属性との属性のペアのうちで理解に用いられるペアの、“述語の概念Bの属性の顕著性の程度/主語の概念Aの属性の顕著性の程度”の組み合わせにより、次の4種類に区別する。まず、概念Bの属性の顕著性もAの属性の顕著性もともに高い場合がある。これを、対応づけられるB、Aの属性の集合をそれぞれ、b、aとし、Ortony（1979）の表記法にならい、“high b/ high a”と書くことにする。この他、順に、概念Bの属性の顕著性は高いがAの属性の顕著性は低い場合（high b/ low a）、概念Bの属性の顕著性は低いがAの属性の顕著性は高い場合（low b/ high a）、概念Bの属性の顕著性、Aの属性の顕著性とも低い場合（low b/ low a）、がある。

“high b/ high a”の組み合わせをとる文は“文字通りの比較（literal comparison）”と呼ばれる。文字通りの比較は、一種の文字通りの意味の文である。

Ortony は、文字通りの比較の例として文例(4)を挙げる。

(4) Billboards are like placards.

(4)において、主語の概念「billboard (看板)」と述語の概念「placard (プラカード)」は、それぞれ「醜い」、「突き出ている」などの属性をもつ。「billboard」側のそれら属性も「placard」側のそれら属性も、各々の側の他の属性に比べ、相対的に顕著性が高く、それゆえ“high b/ high a”のパターンをとっていることになる。

“high b/ low a”の組み合わせをとる文は、先に述べた比喩的比較（隠喩または直喩）になる。“high b/ low a”の組み合わせをとるとき、概念Bの属性と対応するAの属性との間に顕著性の不均衡が生じていると言う。Ortonyによれば、比喩的比較の例には(5)のようなものがあるという。

(5) Billboards are like warts.

文例(5)において、主語の概念「billboard」と述語の概念「wart (いぼ)」とは、それぞれ「醜い」、「突き出ている」のような属性をもつ。「wart」側のそれら属性は、「wart」の他の属性と比べ、相対的に顕著性が高い(high b)。これに対し、「billboard」側の「醜い」、「突き出ている」等の属性は、「billboard」の他の属性との比較において、相対的に顕著性が低い(low a)。その結果、(5)の文は、“high b/ low a”の状態、すなわち顕著性の不均衡が生じている状態となる。

Ortony は、(3a), (1a) の“A is (like) B”の形式の文の述語の属性とそれに対応する主語の属性との間に顕著性の不均衡が生じていることが、高い比喩性 (metaphoricity ; 比喩を比喩と感ずること) をその文が聞き手に与えるための“必要条件”になると述べている。

“low b /high a”の組み合わせをとる文は“反転された直喩 (reversed

simile)”と呼ばれる²⁾。反転された直喩は容認されない文となる。Ortony は、反転された直喩の例として文例(6)を挙げる。

(6) Sleeping pills are like sermons.

(6)において、主語の概念「sleeping pill (睡眠薬)」と述語の概念「sermon (説教)」は、それぞれ「眠気を催す」等の属性をもつ。比喩的比較の顕著性のパターンとは逆に、「sleeping pill」側のそれら属性は相対的に顕著性が高く、対応する「sermon」側のそれら属性は相対的に顕著性が低い(low b/ high a)。

最後の種類の文は“low b/ low a”の組み合わせをとる。この種類の文も、反転された直喩の場合と同様、受け入れられない文である。Ortonyによれば、(7)のような文がこの種類の文の例であるという。

(7) Billboards are like pears.

(7)において、主語の概念「billboard」と述語の概念「pear (洋梨)」は、それぞれ「ものであること」、「物理的対象であること」などといった抽象的な属性をもつ。というより、そうした属性の他には、対応づけることのできる属性のペアがない、と言った方がよいかもしれない。「billboard」側のそれら属性も「pear」側のそれら属性も相対的に顕著性が低く、“low b/ low a”の状態となる。

この分類では、主語の概念の属性に対応づけることのできる属性が述語の概念に存在することが前提となっていた。Ortonyは、実際には、そうした属性が述語の概念側にもない場合もあるとし、その具体例として(8)を挙げている。

2) Ortonyは、直喩文を使って論を進めているので、直喩文の主語と述語を反転した形をとるこの種の文を、“反転された直喩”と呼んでいる。より一般的には、“反転された比喩的比較”と呼ぶべきであろう。

(8) Chairs are like syllogisms.

Ortony によれば、対応づける属性が述語の概念の属性の中にない場合も、“low b/ high a” や “low b/ low a” の状態となる場合と同様に、容認できない文となる、という。しかしながら、どのような二つの概念であっても、それらの間に何らかの類似点が必ず存在する (Glucksberg & Keysar, 1990) から、対応づける属性のペアも必ず存在すると考えられる。たとえば、文例(8)の「chair (椅子)」も「syllogism (三段論法)」も、「役に立つ」というような属性を有するかもしれない。したがって、Ortony の挙げた例文(8)は、類似点、すなわち、対応づけることのできる属性が極端に見つかりにくいだけで、実際には “low b/ low a” の状態となる場合であると考えられる。

Ortony は、上の4種類の文が、概念 A と概念 B との間に感知される類似性の程度において異なっている、と主張する。類似性の程度は、概念 A と B それぞれが、A, B に共通する顕著性の高い属性を数多くもつほど高くなる。また、“A is (like) B” の文として与えられた場合、主語である概念 A は既知情報と、述語である概念 B は未知情報として受けとられる傾向があるから、B の属性の顕著性の方が A の属性の顕著性よりも大きく評価される。したがって、文の意味（すなわちこの場合には概念 A と B との意味関係）ではなく、概念 A と B との間の文内における類似性の観点からみると、最も類似性の高い種類の文から順に、“high b/ high a” の文、“high b/ low a” の文、“low b/ high a” の文、“low b/ low a” の文、となる。もっとも、これらの分類カテゴリーは連続的であり、カテゴリー間に明確な境界があるわけではない。

1. 2 属性の不等

Ortony は、比喩的比較として理解される文の中には、顕著性の不均衡の状態を生じさせるその文の述語の顕著性の高い属性とそれに対応する主語の顕著性の低い属性とが、互いに異なる領域に属しており、表現自体は同じであるが別の概念を指示すると考えられる属性どうしの間でマッチングが行われること

があると指摘する。対応づけられる属性どうしが同一の表現で呼ばれながら概念的には異なることを、彼は、“属性の不等 (attribute inequality)”と呼んでいる。

(9) Encyclopedias are like gold mines.

Ortonyによれば、たとえば、文例(9)は、「価値がある」、「役に立つ」などといった属性を主語「encyclopedia (百科事典)」, 述語「gold mine (金鉱)」がそれぞれ有しており、述語側のそれら属性は顕著性が高く、主語側のそれら属性は顕著性が低い状態、すなわち顕著性の不均衡の状態になる、という。その際、彼は、述語「encyclopedia」側の「価値がある」、「役に立つ」などといった属性が人間の知的活動に言及する概念であるのに対し、主語「gold mine」側のそれらの属性は金銭的ことがらを示す概念であり、それゆえ両者は異なる、とする。

「encyclopedia」側の「価値がある」、「役に立つ」などといった属性とそれに対応づけられる「gold mine」側のそれらの属性との間の類似性は、たとえば、属性「明るい」と「眩しい」との間に見いだされるような文字通りの類似性とは異なると考えられる。Ortonyは、こうした類似性のことを比喩的な類似性と呼ぶ。

Ortonyは、顕著性の不均衡が比喩的比較の文に比喩性をもたらす主たる要因であるとしながら、属性の不等も、顕著性の不均衡の程度を実際よりも過大に評価させ、その結果間接的に比喩性の程度を高める、と主張する。このことは、ある比喩的比較の文を解釈する際に使われた属性のペアとそれとは別の比喩的比較の文を解釈する際に使われた属性のペアの顕著性の不均衡の程度が等しければ、主語の属性の領域と述語のそれとが異なっているペアの文の方がそうでない文よりも、比喩的比較として理解されやすい、ということの意味する。

また、Ortonyは、比喩的比較として理解される文において、属性の不等はとくに際だって感知されるが、文字通りの比較の文においても、属性の不等が

わずかながら見いだされる場合があることを示唆している。彼は、このことに関し、具体的な説明を与えていない。具体例を挙げるとすれば、彼が顕著性の不均衡の仮説の検証を行った実験 (Ortony, Vondruska, & Foss, 1985) の中で材料として用いていた(10)のような文がそれにあたると考えられる。

(10) Moths are like butterflies.

(10)は文字通りの比較として理解される。その際、「moth (ガ)」と「butterfly (チョウ)」はともに「四枚羽をもつ」、「鱗粉がある」、などといった属性をもつと考えられる。しかし、明らかに、「moth」の「四枚羽」と「butterfly」の「四枚羽」とは微妙に異なるし、「moth」の「鱗粉」と「butterfly」の「鱗粉」もまったく同じではない。結局、属性の不等は、文字通りに理解される文から比喩的比較として受けとられる文まで、程度の差こそあれ、容認しうるあらゆる文において見いだされることになる。

属性の不等がわずかでも生じるなら、文字通りの比較として理解される文においても顕著性の不均衡が若干ではあるが生じることになる。このことは、Ortony 自身によって実験的に確認されてもいる (Ortony et al., 1985)。結局、比喩的比較として理解されるためには、ある程度大きな顕著性の不均衡が生じている必要がある (Ortony et al., 1985)、ということになる。

1. 3 マッチングのメカニズム

1.1で述べたように、Ortony は、比喩的比較の文の理解過程が顕著性にもとづいた属性のマッチングの過程であるとしているが、マッチングによって比喩的比較としての解釈が実際にどのように引き出されるかをあまり詳しく説明していない。そこで、顕著性の不均衡による属性のマッチングがどのように行われることになるかを具体的に考察してみることにしよう。

(11) Sally is like a block of ice.

Ortonyによれば、特定の解釈に導く文脈がなければ、文例(1)は比喩的比較として受けとられるという。その際、“a block of ice”は「(精神的に)冷たい」のような属性を指示するであろう(むろん、ときにはそのような属性を超え、概念「氷の塊」に付随するイメージやスクリプトのようなものまで喚起することもありうる)。「(精神的に)冷たい」は、概念「氷の塊」の顕著性の高い属性「(物理的に)冷たい」とのマッチングの結果、引き出されることになる。これに対し、文例(1)は、サリーが猛烈に寒いところから帰ってきたという文脈下で発話された場合には文字通りの比較になる(Ortony, 1979)。この場合には、“a block of ice”は概念「氷の塊」そのものを指示する。直接「氷の塊」を指示すればよいわけであるから、ここでの理解ではそれ以前にマッチングが行われている必要がない。

この観察を一般化すれば、次のようになるであろう。比喩的比較としての理解では、“A is (like) B”の形式の文の述語“B”は、それが通常指示する概念とは別の概念を指示する。述語“B”が新たに指示するようになる概念は、“B”がそれまで指示していた概念Bの顕著性の高い属性Cに対応づけられる主語Aの顕著性の低い属性C'になる。属性Cと属性C'とは同一になることもある。これに対し、文字通りの比較としての理解では、そうした指示対象の変更は行われず、それゆえマッチングも行われていない。

1.1で述べた通り、文字通りの比較と比喩的比較とは、主語側の属性の顕著性とその属性に対応する述語側の属性の顕著性の組み合わせの観点から見ると、主語側の属性の顕著性の程度が異なる(すなわち“high b/ high a”と“high b/ low a”における“high a”と“low a”の違い)だけで、そこには連続的な違いしかない。このことは、文字通りの比較として受けとられる場合には属性のマッチングが行われず、比喩的比較として受けとられる場合には行われる、とする考えとは相容れないように見える。しかし、この見かけの矛盾は顕著性の不均衡の程度に、一定の“閾値”のようなものを想定すればなくなる。その閾値を超えないうちは周囲の属性への指示対象の移動は行われず、超えれば移動が行われる、というメカニズムを考えることができる。このメカニズム

であれば、文字通りの比較としての理解の場合にはマッチングは行われず、比喩的比較としての理解の場合には行われるということと、文字通りの比較から比喩的比較へ至る連続性とは矛盾しない。

1. 4 属性の導入

比喩的比較の文の理解過程が、これまで述べてきたような属性のマッチングの過程、すなわち、述語の指示する概念 B のもつ顕著性の高い属性を、それらと類似した、主語の指示する概念 A のもつ顕著性の低い属性と対応させる過程であるとするれば、述語側に顕著性の高い属性があるにもかかわらず、それに対応する属性が、主語側の属性の中に“ない”場合、その過程はどのように説明できるであろうか？ 1.1で触れたように、どのような二つの概念の間であっても、類似点すなわち主語の概念と述語の概念の双方が有する属性は必ず存在するであろう。したがって、対応する属性がない場合とは、主語の概念に直接的に結びついた属性の中に、述語の概念の属性と対応するものがない場合であることになる。

Ortony は、主語側の属性の中に対応するものがない場合には、述語側の属性で顕著性の高いものと同じ属性が、主語の属性として主語側に導入 (introduce) される、としている。ただし、述語の概念 B の属性で顕著性の高いものと同じであれば何でも導入できるというわけではなく、主語の概念 A のまわりの既存の属性との間に“概念的な不釣り合い (conceptual incompatibility)”を生じさせないものでなければならないとする。Ortony によれば、たとえば、概念「sleeping pill (睡眠薬)」の顕著性の高い属性「being white (白い)」と同じ属性を概念「sermon (説教)」に導入しようとする、「being white」をもちうる概念は物理的対象に限定されており「sermon」は物理的対象ではないから、概念的な不釣り合いを引き起こすという。

Ortony は、主語側に対応する属性がない場合には、属性が導入された後、その属性が概念的な不釣り合いを生じさせないかをチェックすることが必要になるとしている。そして、属性の導入と概念的な不釣り合いが生じたか否かの

チェックを除けば、主語の属性の中に対応するものがある場合と同じ過程をたどる、としている。

Ortony は、属性の導入がどのようなメカニズムで行われるかをさほど詳しく説明していない。属性の導入は、属性の継承 (inheritance) のメカニズムによって最もよく説明されるように思われる。例文 (12a) と (12b) を比較してもらいたい。

(12a) Roger is like a tiger in faculty meetings.

(Glucksberg & Keysar, 1990, より)

(12b) Roger is like a desk in faculty meetings.

(佐山, 1991, より)

「Roger」なる人物を聞き手が知らないとしよう。「Roger」が未知であったとしても、英語母語話者は (12a) を容易に理解できる (Glucksberg & Keysar, 1990)。対照的に、(12b) はきわめて理解しにくいと思われる。(12a) は属性を導入することによって比喩的比較として理解できる場合に相当している (*ibid.*)。述語「tiger」は「勇猛果敢な」、「獐猛な」、などといった顕著性の高い属性を有しているかもしれない。聞き手は「Roger」という人物を知らないわけであるから、そういった属性に対応する属性は「Roger」側にはないはずである。しかし、「Roger」が「人間」であることは聞き手も知っているはずで、概念「人間」には、「tiger」の顕著性の高い属性「勇猛果敢な」、「獐猛な」などに対応するが、顕著性の高くない属性があると考えられる。(12a) が理解しやすいのは、「tiger」の顕著性の高い属性に対応するそうした「人間」の属性を、容易に「Roger」に継承でき、それを「tiger」の顕著性の高い属性に対応する「Roger」の属性とみなすことができるからであると考えられる。

一方、(12b) の述語「desk」は、「水平な」、「四角い」のような顕著性の高い属性を有しているかもしれない。しかし、主語「Roger」のまわりの対象概念に、そうした属性に対応するような属性を有しているものはないように思わ

れる。あるとすれば、「物体」あるいは「ものであること」のような、「Roger」とつながりはあるが離れたところにある、漠然とした、対象とも属性ともつかない概念になるであろう。かりにそうした概念から、「desk」の顕著性の高い属性「水平な」、「四角い」に対応する概念を継承させるとすれば、大きな処理負担を伴うことになるであろう。そういった処理は行いにくいと考えられるため、(12b) はきわめて理解しにくくなると説明できる。

1. 5 マッチングにおける属性の選択

比喩的比較の理解において顕著性の不均衡の状態をとる属性のペアを選択する際、もし同程度の顕著性の不均衡をとる属性のペアが複数あれば（そのようなケースは稀であろうが）、比喩的比較の解釈となる属性も複数ありえ、その結果複数の解釈が成り立つことになる（阿部・佐山, 1990; 佐山・阿部, 1990a, 1990b, 1990c; Searle, 1979a, 1979b）。

(13) Juliet is the sun.

たとえば、『ロミオとジュリエット』の劇において、(13)は、「ロミオの一日はジュリエットとともに始まる」というような意味で使われている（Searle, 1979a）。しかし、『ロミオとジュリエット』の劇中という特定の文脈を離れ、(13)を与えられた場合には、劇中の意味と同じ意味には決して受けとれない（Searle, 1979a）。(13)は通常「ジュリエットは、常に明るく輝き、希望を与え、あたりを輝かせてくれるような存在である」というような意味で使われる（山梨, 1988）。

(13)の劇中での意味にはおそらく「(まわりを) 回る」などといった属性が解釈に関わっているのであろう。一方、一定の解釈に導く文脈から切り離された場合には、「明るい」、「輝く」などといった属性が理解に使われるであろう。『ロミオとジュリエット』の劇をよく知っている英語母語話者にとっては、「回る」も、「明るい」や「輝く」も、「太陽」と「ジュリエット」の両方が有し、かつ、

太陽側で顕著性が高くジュリエット側では低い属性になっており、それゆえ複数の意味をもつものとして多義的に解釈されるものと考えられる。

ただし、複数の比喩の意味をとりえ、かつ文脈上どれか一つの解釈に導かれていない場合であっても、何らかの理由で、いずれかの意味を一貫して選択する、ということはあるかもしれない。文法的な多義性のある文を解釈する際に、とりうる複数の統語構造のうちのどれか一つだけを選ぶ傾向を人はもっている（阿部・桃内・金子・李，1994）。すなわち、文法的に多義的な文が一定の解釈に導く文脈下に置かれていれば、その文脈に誘導された解釈が採られるのはもちろんであるが、特定の文脈下に置かれなくても、いずれか一方に偏って解釈される。これと同様の現象が、比喩的な多義性をもつ文を解釈する際にも起こりうるであろう。

2 文脈・状況に依存したアドホックなカテゴリー化

Glucksberg and Keysar (1990) は、Ortony (1979) の言う顕著性の不均衡にもとづいて隠喩文の理解過程を説明しようとする、属性を選択するメカニズムを明確に与えることができなくなるとし、それゆえ顕著性の不均衡の考えそのものが隠喩文理解過程の基盤にはなりえないと主張する。代わりに、Glucksberg and Keysar は、カテゴリー化にもとづいた隠喩文の理解のモデルを提案してきている。本稿では、彼らのモデルをカテゴリー化モデルと呼ぶことにする。

2.1 アドホックカテゴリー

Glucksberg and Keysar は、Barsalou (1983) の提案するアドホックカテゴリーの概念を、(1a) の“A is B”の文形式をとる文の隠喩的な理解の説明に応用している。アドホックカテゴリーとは、「果物」、「家具」などのような通常的な自然カテゴリーから、何らかの問題解決のために（多くは一時的に）生成されるカテゴリーを指す。たとえば、ハロウィーンのパーティーに何を着て

行くかが話題とされているような文脈・状況下では、「ハロウィーンのパーティーで着ることができるコスチューム」というようなアドホックカテゴリーが話し手、聞き手の心内に作られる (Barsalou, 1983)。Glucksberg and Keysar によれば、Rosch (Rosch & Mervis, 1975 ; Rosch, Mervis, Gray, Johnson, & Boyes-Braem, 1976) の指摘する自然カテゴリーの二つの特徴が、アドホックカテゴリーにもそのままあてはまるといえる。すなわち、きわめて典型的な成員からまったく典型的でない成員まで、あらゆる典型性の値をとるカテゴリーが存在するという特徴、および、任意のカテゴリーが、基本レベル (basic level)、上位レベル (superordinate level)、下位レベル (subordinate level) のいずれかのレベルに階層的に分類されるという特徴である。

2. 2 文脈・状況に依存したアドホックなカテゴリー化

Glucksberg and Keysar は、(1a)の“A is B”の形式の隠喩文の理解過程を、当該文の置かれた文脈・状況上生成されるアドホックカテゴリーを述語“B”が指示し、そのアドホックカテゴリーに主語“A”が通常指示する(自然)カテゴリーをカテゴリー化する過程ととらえる。

(14) My job is (like) a jail.

たとえば、彼らによれば、文例(14)が隠喩として理解される過程は次のページの Figure 1 のようになるという。(14)の述語“jail (牢獄)”は、概念「牢獄」を指示するだけでなく、文脈・状況上「狭い場所に意思に反して閉じこめられ不快である状況」を表すアドホックカテゴリーをも同時に指示すると聞き手によって認定される。その際、そのアドホックカテゴリーは概念「牢獄」の上位概念になる。そして、主語「my job (私の仕事)」が、このアドホックカテゴリーに結びつけられ、その下位カテゴリーとなる。この様子は、Figure 1 では、右端の点線によって表されている。そして、「私の仕事」に、そのアドホックカテゴリーのもつ、「不快な」、「狭い場所に閉じこめられた」、「意思に反して

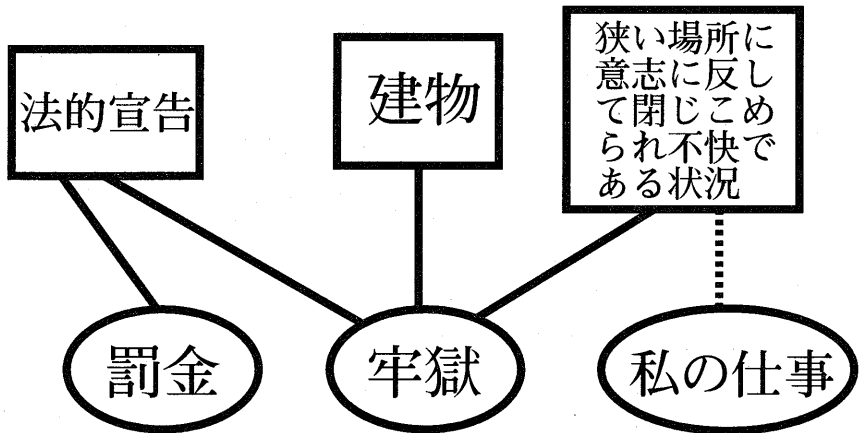


Figure 1 隠喩文「My job is (like) a jail」を理解するために使われる「jail」のまわりのカテゴリー概念。Glucksberg and Keysar (1990) より引用。

そこにいる」などといった属性が付与される。その結果、(14)は「私の仕事は私の意思に反しておりきわめて不快である」というような意味をもつものとして受けとられる。

Glucksberg and Keysar は、一般に、(1a)の“A is B”形式の文が隠喩として理解される場合、述語“B”が、二つのカテゴリーを同時に指示していると主張する。その一つは、(1a)の形式の文の述語が通常指示する自然カテゴリーであり、もう一つは、その自然カテゴリーを典型的な成員としてもつ、名前のないアドホックカテゴリーである。たとえば、上の文例(14)の理解の場合、“jail”は、それが通常指示するカテゴリー「牢獄」、および、それを典型的な成員としてもつアドホックカテゴリー「狭い場所に意思に反して閉じこめられ不快である状況」の二つのカテゴリーを同時に指示する。彼らは、このアドホックカテゴリーの属性を、概念Bの属性と見ることができるだけでなく、概念Aの属性ともみなすことができるようになると主張する。

Glucksberg and Keysar によれば、こうしたアドホックカテゴリーの一部は、特定の述語と結びついて固定化され、慣用的な言いまわしになっているという。

(15a) X is a butcher. (X: 名詞)

(15b) My surgeon was a butcher.

そのような言いまわしの例として彼らは (15a) を挙げている。(15a) の “butcher” は、文例 (15b) のように用いられ、手腕、技巧、経験などを要する専門的な仕事に従事しているながら、それをこなせるだけの能力をまったく持ちあわせていない人のカテゴリーを指示するために慣用的に使われる、という。

2. 3 暗示的な比喩的包含関係としての直喩

Ortony (1979) をはじめ、隠喩文理解の研究に携わるそれまでの研究者たちは、類似性の標識の省略された直喩として隠喩をとらえていた。彼らの考えでは、隠喩は直喩の特別な場合になる。これとは逆に、Glucksberg and Keysar は、直喩が隠喩の特別な場合であると主張する。すなわち、彼らは直喩文を包含関係 (class-inclusion) の暗示された隠喩文とみなす。その理由として、彼らは文字通りの類似性を表す文から類似性の標識 “like” を取り去ると受け入れられない文になるのに対し、直喩文から “like” を取り除いてもそのまま包含関係を表す隠喩として容認しうる文になる、という事実を挙げている。

(16a) Bees are like hornets.

(16b) * Bees are hornets.

彼らによれば、たとえば、文例 (16a) は、主語の指示する概念「bee (ミツバチ)」と述語の概念「hornet (スズメバチ)」との間の類似を示す文字通りの意味の文として受けとられる、という。その際、(16a) の主語 “bee” と述語 “hornet” とは同じ (下位) レベルのそれぞれ互いに異なるカテゴリーを指示する。(16a) から類似性の標識 “like” を取り去った文 (16b) は、(16a)

同様、主語、述語が同一レベルの異なるカテゴリーを指示するから、同一関係として受けとることはできず、(16b)は受け入れられない文となる。

(17a) Sermons are like sleeping pills.

(17b) Sermons are sleeping pills.

一方、文例(17a)は直喩として理解される。既に述べた通り、彼らの考えでは、(17a)の述語“sleeping pills”は、主語“sermons”と同じレベルのカテゴリーを指示するだけでなく、その上位のアドホックカテゴリーをも同時に指示する。それゆえ、(17a)から類似性の標識を取り去った文(17b)は、一種の包含関係を表す文とみなされ、隠喩として理解される。

3 マッチングか？アドホックなカテゴリー化か？

アドホックカテゴリーとしてのカテゴリー化という Glucksberg and Keysar (1990) の考えは、顕著性の不均衡にもとづく属性のマッチングという Ortony (1979) の考えでは隠喩文の理解過程を十全に説明できないとして提出されたものであった。そこで、ここでは、Glucksberg and Keysar によって指摘された、顕著性の不均衡による隠喩的理解の説明の問題点を考えてみることにしよう。

3.1 文字通りの意味の文の情報性

Glucksberg and Keysar は、Ortony (1979) が、(1a)の“A is B”形式の文が文字通りの意味に解釈される場合を、述語“B”側で顕著性の高い属性が主語“A”側でも顕著性の高い状態すなわち“high b/ high a”の状態になっている場合とする点を批判する。彼らは、そうした説明では、文字通りの意味の文は聞き手に何の情報も与えないことになると主張する。彼らによれば、文字通りの意味の文が実際に情報的になる次の場合を顕著性の不均衡の仮説では

説明できない、という。すなわち、述語側の顕著性の高い属性に対応する主語側の属性も顕著性が高いことを聞き手に思い出させる場合である。

(18) A cup is like a mug.

Glucksberg and Keysar は、文例(18)を挙げ、カップがマグのように使えることを聞き手に思い出させたいとき、話し手は(18)を使うことができると指摘する。彼らは、この文を聞き手が文字通りに理解するとすれば、“high b/ high a” 対応となり情動的ではなくなるから解釈できないはずであるとしている。

しかしながら、(18)は“high b/ low a” 対応と受けとられると考える方が妥当かもしれない。聞き手はカップがマグのような機能をもつことを忘れていたのであるから、長期記憶に保持されている概念「cup」の属性で、それに対応する属性が「mug」にあるものは、(18)の文が処理される直前の聞き手の作業記憶内には存在しないかあるいは存在したとしても顕著性は低いであろう。したがって、長期記憶から検索される「mug」の顕著性の高い属性およびそれに対応する「cup」の顕著性の低い属性（存在しなければ導入される）との間で顕著性の不均衡が生じるはずである。

明らかに、この説明では、長期記憶に蓄えられた一種の宣言的な知識としての顕著性と、作業記憶内での情報の活性化のレベルすなわち情報の利用しやすさの程度を示す顕著性とが区別されている。Ortony (1979) は明示していないが、彼の論では、この二つの顕著性が暗黙に区別されている。たとえば、彼は属性の不等が顕著性の不均衡を強めると主張している (1.2を参照してほしい)。このことは、長期記憶に保存されている隠喩文の述語、主語の属性が作業記憶に引き出される際、属性の不等が大きいほど、すなわち述語、主語が指示する概念の属する領域が異なっているほど、述語の属性の顕著性が長期記憶に記録されている顕著性の程度よりも大きく評価されて引き出されるか、主語の属性の顕著性の程度が小さく評価されて引き出されるか、のいずれかまたは両方になることを意味している。

さらに、Glucksberg and Keysar は、同様の論を展開しながら次のような批判も行っている。Ortony (1979) は、主語の概念、述語の概念の双方が有する属性が前景化 (foreground) されると、比喩性の程度が減少し比喩的であると感じられなくなるとしている。前景化とは、対応づけられることになる属性があらかじめ特定されることを言う。Ortony が前景化を説明するために挙げていた次の二つの文例を比較してみよう。

(19a) John's face was like a beet.

(19b) John's face was red like a beet.

Ortony によれば、(19a) も (19b) も同じような意味をもつものとして受けとられるが、(19b) の方が概念「John's face」と概念「beet」が有する属性「red」が前景化されている分だけ、(19a) よりも比喩性が低くなるとしている。そして、前景化が生じると比喩性が低くなる理由を、Ortony は、前景化された隠喩文では、主語、述語の概念が所有する属性の顕著性がともに高い状態、すなわち “high b/ high a” の状態になるためと説明する。Glucksberg and Keysar は、この説明に対しても、文例(18)を理解する場合と同様に、(19b) が情報的にならず解釈できないことになると批判する。

しかしながら、前景化が生じ、主語、述語の概念が有する属性が特定されているのであれば、その属性がそのまま解釈に使われると考えるのが自然であるように思われる。すなわち、前景化が生じる場合には、少なくとも当面は属性のマッチングを行う必要がなくなり、問題の文の理解過程は文字通りの意味の文の理解過程と同じになると考えられる。したがって、前景化されている隠喩文の比喩性が低くなるのは当然であろう。

3. 2 属性の選択

Glucksberg and Keysar は、どのような二つの概念であっても、それらの間に共通する属性を（思いつきやすさに程度差はあるが）無数に考えることがで

きるから、(1a)の“A is B”の形式の文の隠喩的な理解を説明するモデルには、主語の指示する概念A、述語の指示する概念Bの間に共通する属性のうちのどれが理解に使われるのかを事前に特定するメカニズムがなければならない、と主張する。彼らによれば、カテゴリー化モデルは、カテゴリー化を属性の選択に先立って行うので、主語、述語間に共通する属性の中から隠喩的な理解に使われるものをどのような場合であっても選択しておくことができる、という。彼らは、属性のマッチングによる説明では、そうした属性選択のメカニズムを、隠喩文の理解過程の説明の中に自然な形で取り込むことができないため、マッチングのモデルは妥当にならない、と主張する。

とはいえ、Glucksberg and Keysarの援用するアドホックカテゴリーも、それ自体文脈・状況上でしか決めることができないものであった(むろん慣用的に決まる場合は別である)。このことは、(1a)の文形式をもつ文の主語、述語の概念が共通にもつ属性が、常にその文の置かれた文脈・状況によってしか決めることができない、ということの意味する。

カテゴリー化モデルに従うと、述語“B”が実際に指示する概念を計算する際に必要な知識源(データ源)の範囲を、属性のマッチングのモデルよりも、広くとる必要が生じる。すなわち、その計算の際に、言語知識(linguistic knowledge)や概念の知識を参照すると同時に、当該文の置かれた文脈や状況をも参照しなければならなくなる。その結果として、隠喩文の意味が文脈・状況に依存して決まる程度が大きくなる。実際、Glucksberg and Keysarは、(20)のような文字通りの意味の文ですら、文脈・状況なしには解釈を決めることができないと主張する。

(20) Dogs are animals.

彼らは、(20)が「犬が植物のカテゴリーではなく動物のカテゴリーに属している」ことを伝えるためにも、「犬は人間とは違うので、犬を人間のように扱うべきではない」ということを伝えるためにも、あるいはその他の意味にも使う

ことができるであろうが、それらの意味のうちのどれが実際の意味になるかを決めるためには文脈が必要になる、としている。

(20)が単に「犬が動物の一種である」ことを言うために発話されるケースは、犬のカテゴリーが動物のカテゴリーに含まれるという常識を聞き手が忘れていたというような、ごく稀な場合を除けばありえないであろう。一見当たり前の包含関係を表す文をあえて話し手が発話したとしたら、その場合には、Glucksberg and Keysar が指摘するように、包含関係以上の意味を伝えていることを聞き手は想定するであろう。その際、彼らが指摘したような意味をもつものとして聞き手が(20)の文を受けとることを十全に説明するには、顕著性の不均衡にもとづく属性のマッチングか、アドホックカテゴリーとしてのカテゴリー化による必要がある。つまり、この場合は、実際には、隠喩文と同じように理解される。隠喩文と同じように理解されるのであるから、Glucksberg and Keysar の考えに従えば、確かに文脈が必要になる。しかし、前と同じ理由で、そうした理解の説明は妥当にはならないであろう。

このように、Glucksberg and Keysar (1990) の反論は、いずれも実際には Ortony (1979) の顕著性の不均衡にもとづいた属性のマッチングの考え方も説明できることが分かる。マッチングで説明できるということは、隠喩的な理解が、当面は言語知識と概念の知識を参照するだけで進む可能性を示唆する。参照する知識が少なければ、その分処理が効率的になるであろう。我々は、隠喩文に遭遇したとしても、それが新奇なものでない限り、“なぞなぞ”に答えるときに使うような意識的な努力をその理解に払うことは少ない。我々は隠喩的な発話に出くわすことが多いが、かと言ってそのためにコミュニケーションがとどこおることはまずない。属性のマッチングによる説明から導かれる隠喩的な処理の効率性は、こうした事実とも一貫する。Glucksberg and Keysar (1990) のカテゴリー化による説明では、言語知識と概念の知識を参照すると同時に、当該文の置かれた文脈・状況を参照しなければならず、その分処理が効率的でなくなり、結果として大きな処理負担を伴うことになるであろう。

3. 3 隠喩としての理解とアドホックではないカテゴリー化との関係

3.2で、隠喩的な理解のメカニズムとして、顕著性の不均衡にもとづいた属性のマッチングを想定するのが妥当であることを見てきた。前節で述べたように、問題の表現の置かれた文脈・状況ごとに、アドホックなカテゴリーが作られると考えるのはあまり適切ではない。ただし、長期記憶の中に我々は多くのアドホックではない通常のカテゴリー的な知識を持っており、隠喩文を理解するときにもそれらを利用する、ということはあるであろう。そこで、属性のマッチングとアドホックではない通常のカテゴリー的な知識を参照する処理すなわちカテゴリー化との関係を考察してみることにしよう。

カテゴリー化の結果認定される通常の包含関係と隠喩的な意味関係との間には連続的な差しかない (Lakoff & Johnson, 1980)。次の (1a) の “A is B” 形式の文を解釈してみたい。

(21a) An argument is a conversation.

(21b) An argument is fight.

(21c) An argument is war.

Lakoff and Johnson (1980) によれば、「argument (議論)」は「conversation (会話)」の一種であるから、(21a) は包含関係を意味する文であるという。また、(21c) は、「war (戦争)」のまわりの概念の一部と同じ構造が、「argument (議論)」のまわりの概念に与えられているから、隠喩になるという。これらに対し、(21b) は、「fight (格闘)」を単に肉体的な優劣や苦痛を伴うものととらえる人にとっては隠喩に近いが、「fight」を肉体的な優劣や苦痛に加え心理的な優劣や苦痛を伴うものととらえる人にとっては包含関係を表す文に近くなるという。いずれにせよ、(21b) における主語と述語の意味関係は、包含関係でも、隠喩的な意味関係でもなく、両者の中間に位置する意味関係であるという。

Lakoff and Johnson は、二つのカテゴリー A と B とが $A \subseteq B$ の包含関係

にあるためには、類似性に関するいくつかの次元 (dimension) に属するすべての属性をその二つのカテゴリーが共有していなければならないと主張する。そうした次元の中には、知覚次元 (perceptual dimension)、運動・活動次元 (motion activity dimension)、機能次元 (functional dimension)、目的次元 (purposive dimension) がある。このうち、知覚次元とは、下位のカテゴリー A が上位のカテゴリー B と外見上どの程度似ているかに関わる属性の種類を指す。また、運動・活動次元は、下位のカテゴリー A が上位のカテゴリー B とどの程度同じように操作できるかに関わる属性の種類である。機能次元は、下位のカテゴリー A が上位のカテゴリー B と同じ機能を果たすかどうかに関わる属性の種類を言う。そして、目的次元は、下位のカテゴリー A を上位のカテゴリー B とみなしうる文脈・状況ごとに個別的に付与される属性の種類である。

Lakoff and Johnson によれば、あるカテゴリーを指示する名詞に修飾語句をつけると、こうした次元の属性のうち特定の次元の属性が否定されるという。たとえば、模造銃 (fake gun) は、見かけ上本物の銃のように見えるから知覚次元の属性を本物の銃と共有し、また、構えたり狙いをつけたりして本物の銃のように扱うことができるから運動・活動次元に関する属性をも本物の銃と共有しているという。さらに、模造銃も本物の銃と同じ目的すなわち人を威嚇したり誇示したりすることを遂行することができるから、文脈・状況によっては目的次元に関する属性を本物の銃と共有することがあるという。しかし、Lakoff and Johnson は、人を撃つという本物の銃が有している機能を、模造銃はもともと有していないから、機能次元に関する属性は、本物の銃にはあるが模造銃にはないとする。本物の銃と模造銃とは、明らかに包含関係にない。このことは、Lakoff and Johnson が挙げている次元のうちの一つの次元でも欠けると、包含関係が成り立たなくなることを示している。

“A is B”の文の中でカテゴリー A と B が隠喩的な意味関係をとるケースは、これら次元のうちいくつかの次元の属性が A と B との間で共有されていない場合にあたるかもしれない。

(22) This stump is a table. (Miller, 1977, より)

たとえば、ある切り株 (stump) がテーブル代わりに使えるという隠喩的な意味で、文例(22)が発話されたとしよう。(22)は、野外という特別な文脈・状況下でなければ、そのような隠喩的な意味をもつものとして受けとりにくいであろう。したがって、(22)の主語の概念「stump」は述語の概念「table」と、目的次元の属性を共有している必要がある。また、切り株に隙間なく無数の穴が開いていたとしたら、その切り株はテーブルとして使えない。それゆえ、機能次元の属性を主語「stump」と述語「table」とは共有しあっていなければならない。しかし、問題の切り株が見かけ上テーブルと似ていてもいなくても上の隠喩的な意味を運ぶ発話として(22)を使うことが可能である。それゆえ、知覚次元は充たされていてもいなくてもよいことになる。また、通常のテーブルは持ち運びができたり立てかけたりすることができるが、そうしたテーブルの運動・活動次元の属性を、問題の切り株がテーブルと共有していなくても、(22)は先の意味をもつものとして受けとることができる。したがって、運動・活動次元も充たされていてもいなくてもよい。

“A is B”の形式の文を文字通りに理解する場合に行われる包含関係の判断(カテゴリー化)の中には、知覚のテスト(perceptual test)すなわち包含するかもしれないカテゴリーのもつ知覚的な属性を、包含されるかもしれないカテゴリーが有しているかどうかに関するテスト、および、機能のテスト(functional test)すなわち“包含する”カテゴリーのもつ機能的な属性を“包含される”カテゴリーが有しているかどうかに関するテストの2種類のテストを行うという指摘がある(Miller, 1977)。両方のテストに合格すれば、“包含する”カテゴリーと“包含される”カテゴリーとは実際に包含関係にあると認定されることになる。また、一方のテストにのみ合格すれば、“包含する”カテゴリーと“包含される”カテゴリーとは実際には包含関係にはなく隠喩的な関係にあることになる。たとえば、Millerによれば、「picture of a table (テ-

ブルの絵)」は、知覚のテストに合格するが機能のテストには合格しないという。それゆえ、「picture of a table」と「table」との間の関係は隠喩的であるという。また、彼は、「packing case（輸送用包装箱）」は、知覚のテストには合格しないが機能のテストに合格するとする。それゆえ、「packing case」と「table」との間の関係も隠喩的であるとする。

Miller は、知覚のテストが、“包含する”カテゴリーの知覚的な属性にもとづく一種の真偽判断であると主張する。そして、真偽判断の結果である真偽値は文の意味の一部であるから、その知覚的な属性は“包含する”カテゴリーを指示する語句の語彙的知識に含まれると考えるのが自然であるとする。同様に、彼は、機能のテストが、“包含する”カテゴリーの機能的な属性にもとづく一種の可能性 (possibility) の判断である、とする。そして、そうした可能性の判断は、真偽判断と同じようになされると主張する。このことから、Miller は、機能的な属性も知覚的な属性と一緒に、“包含する”カテゴリーを指示する語句の語彙的知識の中に含めて考えるべきであると結論する。語彙的知識は、言語知識と概念の知識の範囲内にあるから、結局、通常の包含関係の判断 (カテゴリー化) におけるテストは、言語知識と概念の知識の範囲内で行われると考えるのが妥当ということになる。

こうした Miller の指摘から、次のような推測が成り立つかもしれない。(1a) の“A is B”の文形式の文の隠喩的理解の中には、主語“A”の指示するカテゴリーを述語“B”の指示するカテゴリーの成員か否かを判断する通常のカテゴリー化が含まれる。そうしたカテゴリー化は、述語“B”の指示するカテゴリーのもつある種の属性についての判断であり、その際、その属性は言語知識および概念の知識を参照し引き出される。より一般的に、“A is B”形式の文の理解の過程には、それが文字通りに解釈されるか隠喩的に解釈されるかあるいはその他の意味に解釈されるかの如何を問わず、通常のカテゴリー化の過程、すなわち、カテゴリー A をカテゴリー B の成員か否かを判断する過程が含まれるかもしれない (阿部・佐山, 1990; 佐山・阿部, 1990a, 1990b, 1990c)。

このことは、3.1で述べた結論、すなわち、(1a) の形式の文の隠喩的な理解

の基本的なメカニズムが、顕著性の不均衡にもとづく属性のマッチングであり、そのマッチングの際、言語知識および概念の知識の範囲内でマッチングに必要な属性の検索が行われるとする考えと一貫する。最初に通常のカテゴリー化が行われ、主語の概念 A と述語の概念 B とが包含関係にないと判定された場合に限り、顕著性の不均衡にもとづくマッチングの処理が起動される。すなわち、長期記憶から検索された情報を、初めはそのまま入力された文の一部に直接適用し、うまく行かない場合に限り、検索された情報を加工・修正し再度その適用を試みる、というわけである。

4 隠喩文の理解に使われる知識（データ）

1.2で触れたように、顕著性の不均衡にもとづく属性のマッチングのモデルでは、隠喩文によっては、比喩的に類似する属性間でマッチングが行われる場合があった。同一でもなく、また文字通りに類似しているわけでもない属性どうしのマッチングでもかまわない理由は、マッチングが概念的比喩に支えられている場合があるからである。そうした場合でなければ、マッチングは、概念的比喩にではなく（包含関係や全体部分関係などを含む意味的な関係の種類としての）文字通りの意味に依拠する。本節では、まず、隠喩文の理解を成立させる基盤としての概念的比喩と文字通りの意味について考察する。そうした考察を通じ、概念的比喩が、隠喩文の理解の“過程”においてどのような役割を果たしているかを考える。さらに進んで、隠喩としての理解と類推（analogy）との関係についても言及する。

4. 1 概念的比喩と意味関係のタイプとしての文字通りの意味

属性が比喩的に類似するということ、すなわち Ortony の言う属性の不等とはどのようなことであったかを、文例(23) ((1)に同じ)を用いてもう一度考えてみよう (1.2も参照のこと)。

(23) Sally is a block of ice.

(23)において、主語の概念「Sally」と述語の概念「a block of ice」とはそれぞれ「冷たい」という属性を有する。しかし、「Sally」は心理的に冷たいのに対し、「a block of ice」は物理的に冷たいにすぎない。したがって、「Sally」の属性「冷たい」と「a block of ice」の属性「冷たい」との類似性は比喩的である。

感情の「冷たさ」と温度の「冷たさ」との間の比喩的な類似性は、経験的にあるいは慣習的に決定されているにすぎない (Searle, 1979a)。こうした比喩的な類似性は、後述するような、一種の概念的比喩にもとづくものと考えられる。一般に、概念的比喩は、(意味関係の種類としての) 文字通りの意味とともに、人の知識を構成する基本的な意味関係になっており、人の言語の理解を支えている (Lakoff, 1990; Lakoff & Johnson, 1980; Lakoff & Turner, 1989; Martin, 1990, 1992; 山梨, 1982, 1988)。ともに言語の理解において利用される知識(データ)のタイプの一つであるという点では、概念的比喩と文字通りの意味は異なるところがない。それゆえ、比喩的な類似性にもとづくマッチングも通常のマッチングも処理の仕方に実質的な違いはないであろう。

Johnson and Lakoff (1980) は、英語母語話者が様々な概念的比喩の言語知識を有していることを豊富な例を用い考察してきている。彼らの挙げる概念的比喩には、方向づけの比喩 (orientational metaphor)、存在の比喩 (ontological metaphor)、構造的比喩 (structural metaphor) の3種類がある。これらの他、共感覚 (synesthetic) にもとづく比喩も概念的比喩の一種と考えられる(共感覚比喩については、楠見, 1988, 山梨, 1988, などを参照されたい)。

Johnson and Lakoff によれば、彼らの挙げる概念的比喩のうち、知識の最も基本的な単位とみなしうる概念的比喩が、方向づけの比喩および存在の比喩であるという。このうち、方向づけの比喩とは、何らかの連続的な程度差をもつ概念と、空間的な上下関係や前後関係などとの対応を指す。彼らは、英語母語話者の言語知識および概念の知識の中で、量、価値、楽しさ、などといった概念が、空間的な上下関係に、経験的な基盤の上に対応づけられているとする。

たとえば、量と上下関係の対応は Figure 2 のように図示される。彼らは、この対応を反映した表現の例として、(24), (25)を挙げている。

(24) My income rose last year.

(25) He is under age.

方向づけの比喩のもう一つの例が、時間的な前後関係と空間的な前後関係との対応である (Glucksberg & Keysar, 1990 ; Traugott, 1978)。英語では、過去は後方にあるものとして、また未来は前方にあるものとしてとらえられる。

先ほど挙げた文例(23)における、感情的な「冷たさ」と物理的な「冷たさ」との間の対応も、ある種の方向づけの比喩の一部と考えることができるかもしれない。ただし、この方向づけの比喩は、Figure 2におけるもののような直接

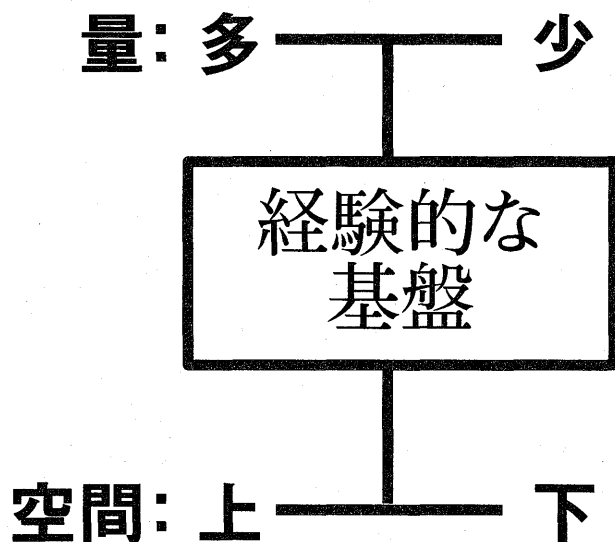


Figure 2 量の多寡と上下関係との対応。Johnson and Lakoff (1980) より引用。

的な対応ではなく、Figure 3(a)とFigure 3(b)に図示されるような、二つの対応が組み合わされた意味関係であるかもしれない³⁾。

隠喩文の中には、概念的比喩にではなく、文字通りの意味にその理解の基盤をもつものもある。そうした隠喩文は、いわゆる選択制限 (selectional restriction) に違反しない隠喩文である。

(26) My surgeon was a butcher

たとえば、(26) ((15b)と同じ) は、「私の外科医は不器用で仕事が雑だった」というような意味に理解される (Glucksberg & Keysar, 1990)。その際、「butcher」の顕著性の高い「不器用な₁」のような属性と、「my surgeon」の顕著性の低い「不器用な₂」のような属性とがマッチングに使われると考えられる。その際、「不器用な₁」と「不器用な₂」とは実際には同一の属性であり、それゆえそれらの対応は文字通りである。

4. 2 隠喩文の理解過程における概念的比喩の役割

概念的比喩は、隠喩文の理解の“過程”においてどのような役割を果たしているのだろうか？もう一度文例(23) ((11)と同じ) を使って考えてみよう。4.1で述べたように、「Sally」の属性「冷たい」は心理的な感情の領域に属するのに対し、「a block of ice」のそれは物理的な温度の領域に属する。この感情と温度の対応関係は経験的・慣習的に決定されている。Figure 3(a)とFigure 3(b)に図示したように、共通する属性の「たとえられる概念」の側の次元 (たとえば、Figure 3(a), (b)の温度の高低) は、さらに別の次元に (たとえば、

3) あるいは、感情的な「冷たさ」と物理的な「冷たさ」との間の対応関係は、二つではなく三つの対応の組み合わせからなっているのかもしれない。すなわち、感情の「暖-冷」と温度の「高-低」との対応関係が、実際には感情の「暖-冷」がまず温度感覚の「温-冷」と経験・慣習を介して対応し、温度感覚の「温-冷」がさらに物理的に客観的に測定しうる温度の「高-低」と経験・慣習を介して対応するのかもしれない。

Figure 3(b)の空間の上下)に対応すると考えられた。このように、隠喩文の中には、共通する属性の対応に始まる対応の連鎖で、かつ、最終的に概念的比喩あるいは文字通りの意味(関係)にたどりつく連鎖をもつものが存在すると考えられる。もちろん対応の連鎖の長さは、個々の隠喩文によって異なる。

一般的に言って、隠喩文の理解の過程の中で概念的比喩や文字通りの意味に至る連鎖全体が参照される可能性は少ないと思われる。直接理解に使われるのは、マッチングの対象となる属性間の対応だけであろう。「たとえられる概念」の側の属性から、その先にある連鎖まで参照されるとしたら、一つの隠喩文を理解するのに要する処理負担が大きくなりすぎ、隠喩文に出くわすたびに会話や読書は途切れ、クイズでも与えられたかのように考えこまざるをえなくなるであろう。

4. 3 隠喩的な理解と類推との関係

(1a)の形式をとる文の隠喩的な理解が成立するためには、少なくとも、表層表現“A is B”の中の“B”が、通常とは異なる何らかの概念を指示していると分かる必要がある(Searle, 1979a)。たとえば、(2b)の“女性は太陽である”を隠喩として理解できるためには、“太陽”が概念「太陽」とは別の「明るい」、「眩しい」などといった概念を指示していると分かる必要がある。かりに(1a)の“A is B”の形式の文を隠喩的に理解することが、2項関係の類推であったとしてみよう。すなわち、(1a)の形式の文の隠喩的な意味が、「A : A' = B : B' (AのA'に対する意味関係は、BのB'に対する意味関係と同じである)」であったとしよう。こうした類推では、概念A'および概念B'、さらには概念AとA'の意味関係(BとB'の意味関係)を推論する必要がある。それゆえ、類推の方が隠喩文の理解よりも、推論しなければならないことがらが多くなる(Searle, 1979a, 1979b)。

(27) A lifetime is a day. (Glucksberg & Keysar, 1990, より)

たとえば、文例(27)を理解する際には、最低でも、「人生 (lifetime) : x = 一日 (day) : y」が成り立つような、概念 x, y, および「人生」と x との意味関係（「一日」と y との意味関係）を推論する必要がある。

5 まとめ

“A is B”の文形式をとる文の隠喩的な意味の計算は、顕著性の高低をもとに概念 A, B の特定の属性をマッチングすることによって行われると考えられる。Glucksberg and Keysar (1990) が言うように、カテゴリー化によって隠喩的理解を説明しようとする時、当該文の置かれた文脈・状況に依存して決まるアドホックカテゴリーを構築するメカニズムを考える必要が生じる。そうしたアドホックカテゴリーは、言語知識および概念の知識の範囲を超え、文脈・状況の知識にまで検索の範囲を広げなければ構築できない。言語表現を理解するために、最初に言語知識や概念の知識を参照し、その範囲内にあるデータを使って、その言語表現に対する何らかの表象を構築すると考えるのは自然であろう。初めから参照する知識の範囲を文脈・状況の知識の範囲にまで拡大して解釈しているとすれば、それだけ処理が複雑になる。その結果、処理が効率的でなくなり処理負担も大きくなるばかりでなく、コミュニケーションそのものが円滑に進まなくなるであろう。

隠喩文の理解を支える知識には、概念的比喩、および（包含関係、全体部分関係等を含む意味関係のタイプとしての）文字通りの意味がある。Lakoff and Johnson (1980) によって例証されてきているように、概念的比喩を構成する二つの概念は類似性で結びついていない。多くの隠喩文は、この類似性にもとづかない概念的比喩によって比喩的な類似性を与えられており、それを用いて理解されている。

隠喩文の理解のメカニズムの説明には、まだ解明されていない点が多く残されている。マッチングに用いられる属性は一種のスキーマ (Ortony, 1979) であり、その結果として生じるカテゴリーはいくつかの次元からなる一種のゲ

シュタルト (Lakoff & Johnson, 1980) である。スキーマとしての属性の実体, あるいはゲシュタルトとしてのカテゴリーの実体は明らかにされていないままである。

引用文献

- 阿部純一・桃内佳雄・金子康朗・李光五 (1994). 人間の言語情報処理：言語理解の認知科学. サイエンス社.
- 阿部純一・佐山公一 (1990). 日本語名詞述語文の意味解釈過程のモデル化 (I) : 問題と知識表現. 日本心理学会第54回大会発表論文集, 683.
- Barsalou, L. (1983). Ad hoc categories. *Memory & Cognition*, 11, 211-227.
- Gentner, D. (1983). Structure-mapping : A theoretical framework for analogy. *Cognitive Science*, 7, 155-170.
- Glucksberg, S., & Keysar, B. (1990). Understanding metaphorical comparison : Beyond similarity. *Psychological Review*, 97, 3-18.
- Indurkha, B. (1987). Approximate semantic transference : A computational theory of metaphor. *Cognitive Science*, 11, 445-480.
- 楠見孝 (1985). 隠喩文における語句間の類似性：意味特徴の顕著性が隠喩理解に及ぼす効果. 心理学研究, 56, 269-276.
- 楠見孝 (1988). 共感覚に基づく形容表現の理解過程について：感覚形容語の通様相的修飾. 心理学研究, 58, 373-380.
- Lakoff, G. (1987). *Women, fire, and dangerous things : What categorization reveals about the mind*. Chicago : University of Chicago Press.
- Lakoff, G. (1990). The invariance hypothesis : Is abstract reason based on image-schemas? *Cognitive Linguistics*, 1, 39-74.
- Lakoff, G. & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. Chicago : University of Chicago Press. (レイコフ G.・ジョンソン M. 渡辺昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳) (1986). レトリックと人生. 大修館書店.)
- Lakoff, G., & Turner, M. (1989). *More than cool reason : A field guide to poetic metaphor*. Chicago : University of Chicago Press.
- Martin, J. H. (1990). *A computational model of metaphor interpretation*. San Diego, CA : Academic Press.
- Martin, J. H. (1992). Computer understanding of conventional metaphoric language. *Cognitive Science*, 16, 233-270.
- Miller, G. A. (1977). Practical and lexical knowledge. In P. N. Johnson-Laird & P. C. Wason (Eds.), *Thinking : Readings in cognitive science* (pp. 400-410). Cambridge University Press.
- Miller, G. A. (1979). Images and models, similes and metaphors. In A. Ortony (Ed.), *Metaphor and thought* (pp. 202-250). Cambridge : Cambridge University Press.
- Ortony, A. (1979). Beyond literal similarity. *Psychological Review*, 86, 161-180.
- Ortony, A., Vondruska, R. J., & Foss, M. A. (1985). Salience, similes, and the asym-

- metry of similarity. *Journal of Memory and Language*, 24, 569-594.
- Rosch, E., & Mervis, C. B. (1975). Family resemblances : Study of Categories. *Cognitive Psychology*, 7, 573-605.
- Rosch, E., Mervis, C., Gray, W., Johnson, D., & Boyes-Braem, P. (1976). Basic objects in natural categories. *Cognitive Psychology*, 8, 382-439.
- 佐山公一 (1991). 「Ad hoc カテゴリー」へのカテゴリー化 vs. 「顕著性の不均衡」の計算：比喩文意味解釈過程の二つの見解の比較検討。北海道心理学会第38回大会(北海道心理学会・東北心理学会第7回合同大会)発表抄録集, 39-40.
- 佐山公一 (1995). 修辭理解の認知過程に関する研究：名詞述語文の意味解釈を中心として。北海道大学大学院文学研究科博士論文, 未公開.
- 佐山公一・阿部純一 (1990a). 日本語名詞述語文の意味解釈手続きについて。情報処理学会自然言語研究会報告(自然言語処理), 78-9, 65-72.
- 佐山公一・阿部純一 (1990b). 日本語名詞述語文の意味算定手続き：“文字通り”の理解から修辭的な理解まで。日本認知科学会第7回大会発表論文集, 124-125.
- 佐山公一・阿部純一 (1990c). 日本語名詞述語文の意味解釈過程のモデル化(Ⅱ)：その処理手続き。日本心理学会第54回大会発表論文集, 684.
- Searle, J. P. (1979a). Metaphor. In A. Ortony (Ed.), *Metaphor and thought* (pp. 92-123). Cambridge : Cambridge University Press.
- Searle, J. P. (1979b). *Expression and meaning*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Traugott, E. C. (1978). On the expression of spatiotemporal relations in language. In J. H. Greenberg, C. A. Ferguson, & E. A. Moravcsik (Eds.), *Universals of human language III* (pp. 369-400).
- 山梨正明 (1982). 比喩の理解。佐伯胖(編). 推論と理解(認知心理学講座3, pp.199-213). 東京大学出版会.
- 山梨正明 (1988). 隱喩と理解。東京大学出版会.